

イクボス
モデル
02



坪井 良治

医学科
皮膚科学分野
主任教授

防衛医科大学卒業
順天堂大学博士課程修了
博士（医学）
2002年より現職

ボスとして大切な仕事は どのようなことですか？

医局員が気持ちよく働ける環境を作ることがボスとしての仕事です。皮膚科は女性が多い職場だから、入局する者にセクハラなどは絶対に認めないと必ず伝えていきます。後期研修医でも、中途キャリア組であっても入局して最初の1年間は一番多くの当直をこなしてもらい、まずは頑張ってもらっています。専門医と学位を取得してほしいというキャリアメッセージも送っています。それから、皮膚科以外の専門を持つ医師の入局も多く受け入れています。専門も多様なスタッフが集まり、男性だけでなく、女性も多く、トータルで優秀な力を発揮できていると思います。まさにキャリアのダイバーシティです。

皮膚科学 について 一言

皮膚は目で直接診るだけで内臓の状態までわかりますし、顕微鏡があれば、椅子に座って一生長く仕事ができます。海外では人気ベスト3に入る分野で競争が激しく、優秀でないと入局できない状況です。また、女性医師の割合が多く、皮膚科学会では男女共同参画に向けての取組も熱心です。女性医師にも研究成果を上げてもらわないと学会の発展は望めません。

女性医師が出産した 子供の数が44名

私が医局をマネジメントするようになって13年、その間に女性医師たちは50名近くの子どもを生みました。特に口に出して勧めたわけではないけれど、結婚して、出産したいということであれば、サポートしてきた結果かもしれません。過保護にはできないけれど、病棟や外来を一時的に外すといった負担を軽くする融通をしてきたつもりです。また、出産して戻ってくる女性がロールモデルになって、増えていったのでしょう。ロールモデルは大きな力になるようです。

「コウノトリ作戦実施中」

そのうち、子どもを産む暇もなく働き続けて年齢が高くなった女性医師から不妊治療の希望が出てきました。仕事の負担を減らすこと、スポットで休む日も多くなることを認め、周りにカバーしてもらおうので、「コウノトリ作戦実施中」と宣言してもらうことにしました。こうして40歳を超えた女性も含め、不妊治療で子どもを持つことも実現しています。また、まだ多くはありませんが、「お迎えがあるから先に帰ります」と早く帰宅する男性医師も見かけるようになりました。今後、男性の中にも育児休業などを取得する人が増えてくると思います。男性、独身だけに負担が増えないように、みんなが頑張れるときに頑張り、何とか組織全体でカバーしていくということです。

子どもを産み仕事に復帰する ロールモデルが職場風土を 変えていく力に

未来の女性研究者への応援メッセージ

ライフイベントは大変だけれど、乗り切って仕事を続けてほしい

少し休んでもいいのだから、また復帰して頑張ってもらいたい。ライフイベントがなければ、女性の方が優秀なぐらいです。残念ながら職場のサポートだけでは足りなくて、辞めていく女性もいます。家庭のサポートも必要です。理解があり、ともに頑張ってくれる夫や夫の家族を持つことも考えておくといいと思います。また、ベビーシッターなども利用し、お金を使って赤字になっても、長いスパンで人生を考え、辞めないでほしいと願っています。

